

追悼・愚光兄

百々海 真

愚光法兄は、拙寺前住の頃から聴聞に来られていたお一人です。04年5月22日朝、羽田空港の搭乗ロビーで法兄と偶然一緒になり、行き先も私と同じく松任明達寺様での暁鳥敏師五十回忌法要とのことで驚きました。企業勤務の経験も共通し、一挙に親しくなりました。

前住は「川崎さんのおかげで、やっとここに来られたよ」(『のらの段ボール法語』9頁)と、本誓寺虫干法会のご縁をよろこんでいたようです。寺とは長らく関係を断ち、聖典を開くことさえなかった私を大阪の響命精舎(林一宗師)や本誓寺に導いてくださったのも「川崎さん」でした。05年7月24~27日、虫干法会に初めて参詣し、松本梶丸住職、衆徒の浅田正作氏(詩集『骨道を行く』著者・聞思院釋教行・令和元年11月17日100才にて西帰)やその親友清水義一氏に遇えました。浅田さんは「偏依梶丸一師」といわれ、二十才ほど年下の梶丸住職を師として仰ぐ軽やかな方でした。瘦身の清水さんは、いぶし銀さながらの佇まいでした。法兄の信心の表白「私の出遇った念仏者」(『じねん』第73号・茨城親鸞の会)には、これらお三方の上にはたらく法味が讃嘆されています。そして八木重吉や吉野秀雄の言葉や地元の同行の仰せに真実を聞きあて、時には曹洞宗の尼僧、青山俊董老師にご法話を依頼される梶丸師の聞思の姿勢に法兄は深く感銘され、また詩作のきっかけも「浅田さん」と「梶丸先生」との出遇いからでした。そして「のら」「風来坊」との自称は、そうなりきれない悲しみから湧きあがったものでしょう。のら猫は知らぬ間に消え去りますが、「真さん。人間は、そうはいかねえんだよなあ」と電話で幾度も言われていました。

「不自由の中の自在庵」との表札は、法兄自身が、そして一切衆生が拝命すべき勅命を門前に掲げた報恩行でしょう。まさしく「完全なる自由と絶対的服従との双運」(清澤満之『精神主義』)です。私たちからは近すぎて帰れない、分別以前への回帰であり、その帰り道は南無阿弥陀仏の他になし、と聞きとっておられた法兄でした。

頑固な一面も併せ持つ法兄でしたから、時には「川崎さん。それは言いすぎだよ」と言わせてもらい、またある時には拙寺からの帰り道に某所で息抜きし、後日の電話で「真さん。オネーサンたちはなあ、坊さんよりも優しいんだぞ」と、冗句とも本気ともとれぬ真実を言ってくくださった、私にとっての耆婆であり維摩居士でした。

海沿いのあの店で、また釜めしをご馳走になりたかった。やっぱり、寂しいものです。
南無阿弥陀仏 (東京・了善寺住職)

愚光さん(野良犬)と 求道(糸の切れた凧)

大原求道

碁敵という同好の間柄を表す言葉がありますけれども、一時期「野良と凧」と称して那珂市の上宮寺百日晨朝を中心として良く遇っていた事があります。聞法敵という言葉があれ